樋口勲著「安全管理の現場力ースタッフへのアドバイスー」

中央防災新書、中央労働災害防止協会 2004 年 7 月 23 日刊を読む

ゼロ災とＰＤＣＡ

１.「ゼロ災運動」が提唱されたころと比べて、われわれを取り巻く環境が大きく変化しているのも事実だと思います。

２. そこで、この変化に合わせてゼロ災運動も考えなければならないと思います。もちろん、理念、実践、手段のトライアングルは不変です。

３. まず、OSHMS(労働安全衛生マネジメントシステム)の仕組みとゼロ災運動との一体化推進です。すなわちゼロ災運動を PDCA のサイクルとしてどう回転させるかです。

４. ここで、今一度、PDCA というサイクルについて整理すると、

(１)PLAN …計画を立てる

①目的をはっきりさせる

②どこまでやるかを決める

③どのようにやるか、方法を決める

④各人の役割を決める

(２)DO …計画どおり実施する

①決めたことを、全員で実施する(やりきる)

②不慣れな人、不得意な人も一緒にチームワークを大切にして実施する

(３)CHECK …結果を確認する

①結果を見て、計画どおりか確認する

②計画に盛られた目標値と比較してみる

(４)ACT …処置する

①結果が計画どおりであれば、その良い状態を引き継ぎ維持していくために、やるべきことを考える

②計画どおりでなかった場合は、なぜそうなったかを考えて、改善策を立て、それを次の計画に役立たせる

５. 従来ややもすると、単なる運動としてとらえてきたために組織的、体系的に進めることにやや弱い面のあったゼロ災運動を、この PDCA サイクルとして整理することです。

６．企業、職場の経営計画の中に、はっきりとゼロ災運動そのものを入れるのです。

７．そのためには、OSHMS でいう各級管理者の任務と責任を明確にすることです。

８．単に、KYT(危険予知訓練)を何回やったかではなく、KYT を実施するにはどこをどのようにするか、指差し呼称を定着するには、何をどのようにするかを、推進計画の中に明確にすることだと思います。

「毎日が同じ作業なので、KYT をやってもいつも同じ答えになる」

「指差し呼称をやっても効果が分からない」

等の意見がよく出ます。

われわれの周りには、リスクがいっぱいあるのだということを、もう一度思い出していただきたいのです。

職場の人員構成も日々変化しているのです。

９．KYT と指差し呼称の体系的な取り組み、フォローアップの方法を工夫し、企業の組織活動としてゼロ災運動を定着化させることにより、このような考えを払拭することです。

P243

[コメント]

どのように職場における事件・自己を撲滅するか。PDCA の回し方の基本を樋口先生の本書で知ることができる。担当者のみならず全社を挙げて学びたい。

－ 2011 年 5 月 6 日林　明夫記－